日常外

川崎ゆきお

「毎日同じことを繰り返していると、別のことをするのが大層になりますなあ」

「そうなんですか」

「一日のスケジュールがあります。たまに用事が入ると、レールから逸れるようで、落ち着かないのです」

「そういった用事の寄せ集めが、スケジュールでしょ」

「はい、予定表ですが、そんな表は必要ではありません。順番が決まってますから。それにやることも決まっています。そこに別の用事が加わるとペースが乱れるのです」

「でもたまに違うことをすると、刺激があっていいでしょ。同じことばかりだと退屈して、別のことがやりたいと思いませんか」

「思いません」

「ほう」

「むしろ普段の用事がおろそかになり、日常生活が乱れます。これは、いいことでも悪いことでも、どちらもです」

「楽しい用事が入れば、普段の用事より楽しいはずなので、楽しい時間が過ごせると思うのですが」

「あなたがね」

「え」

「だから、あなたがそう思うだけです」

「ああ、はい」

「ただ、突発的なことはいいのです。予定にないような。しかもいきなり起こるような用事なら」

「それは何ですか」

「予定にない用事なら、受け入れやすいのです。普段の用事をこなしているとき、一寸変化があったり、突発的なことが起こったりとかね。これは付録です」

「つまり、日常の過ごし方の話ですね」

「そうです。日課のようなものでしょうか。それが徐々に変化していきます。自然な変化かどうかは分かりませんが、そういう気風になり、今までやっていた用事が消えて、別の用事に変わったりします。だから一年前なら同じかもしれませんが、二年、三年になると、用事も変化してい

るのです」

「学校なんかはそうですねえ。ずっと同じ学校で何年も過ごせませんから」

「まあ、それは起きて行く学校が違う程度です。やがて会社になるとしても、起きて行く場所が一寸変わっただけです。二部もあるので、夜から行く学校もありますがね」

「どちらにしても、退屈しませんか」

「だから、日常の用事があるので、それをこなしているだけでも一杯一杯ですよ。忙しいほどです。もう少しゆったりとしたいほどです」

「日常の中に何か深みでも」

「深み」

「極めるとか」

「いや、ただの習慣ですよ。大したことなどしていません」

「変わったものを見たり、刺激を味わったりは、だめですか」

「いやいや、日常の中にも結構変わったもの、刺激的なものが入ってますよ。わざわざ狙わなくても」

「はい」

「しかし、今日は」

「そうです。ばったり昔の人と合ったので、話してしまいました。これは日常にはない。こういう偶然が色々あるんです。日常外のことがね」

「何か、奥義のようなものを見ました」

「浅いです。そんな奥はありませんよ」

「あ、はい」

了